

高樹のぶ子

光抱く友よ

新潮社



光抱く友よ

高樹のぶ子

新潮社

日本財団支援

# 笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

光<sup>ひかり</sup>抱<sup>いだ</sup>  
く友<sup>とも</sup>よ

著者 高樹<sup>たかぎ</sup>のぶ子

発行 昭和五十九年二月十日  
七刷 昭和五十九年五月十日

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)一二六六―五一―

編集部(03)一二六六―五四―

振替 東京 四―八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 八八〇円

ISBN4-10-351601-1 C0093

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取り替えます。



目次

|            |     |
|------------|-----|
| 光抱く友よ…………… | 5   |
| 揺れる髪……………  | 89  |
| 春まだ浅く…………… | 119 |

装  
面  
幾  
嘔

光抱く友よ



光抱く友よ



(一)

屋根すれすれに飛んできた黒い小さな鳥が、見えない空気のかたまりをひよいと乗り越え、校舎の向う側に落ちこんだ。相馬涼子は、西陽を溜めたそのあたりに目をとめながら自分の教室に歩いていった。

南側に建つ別棟の陰の中にある足元は、ひんやりと湿っているばかりか、校舎と校舎の間に細長くのびた花壇の、黄菊、蕃<sup>とうがらし</sup>椒も、色を失ってひっそりとしている。

ガリ刷りしたばかりの会計報告書のインクの匂いが、夕刻のつめたい大気に混じって鼻をついた。

一週間前に終わった体育祭の会計報告書を、結局、涼子ひとりで作成した。一緒にやるべきもうひとりの学級体育委員は、当日の百足競走で捻挫し、授業が終わると急いで病院へ行かなければならないとかで、

「ね、涼子、頼む、ざあっと書いてしゃっしゃつと四十枚刷りゃいいことだから、あんたは仕事が早いから、頼む、このとおり」と合掌した手を顔の前で二、三度振ってみせた。病院に通っているのは足首の包帯を見ればわかった。彼女が下校を急ぐのは、毎日四時間はこなさなければならぬというピアノのレッスンも関係しているのかもしれない。

涼子は彼女の身勝手さを感じながら、心とは裏腹に気安く引き受けてしまった。ひとり印刷室で手を汚しながらローラーを押していると、いつものことだが、こんなふうにする他人の言いなりになる自分に腹が立ってきた。

女ばかりのクラスでは、休みの時間ともなると幾つかのグループができて話が弾む。進学のこと、映画や俳優の話題だけでなく、教師や親の悪口もとび出すわけだが、そんなとき、決まって話題に水をさす者が現われた。大勢が賛成する気配が濃くなってくると「でもさあ、それはどうかなあ」と切りこんでくる。

天邪鬼、と陰で悪口を言う者もいるが、涼子はひそかに彼女達を偉いと思っていた。自分への自信がなければできないことで、それが彼女達のどこから生まれてくるのか、ともかく自分には真似ができない。話題の輪の中にあつて、何ともはつきりしない曖昧な笑顔を保っているとき、涼子の気分はしだいに情ないものになっていった。

こういう自信の無さは、担任の英語教師三島良介のことを考えるとき、もつと複雑な思いを伴って自覚されるのだった。

三島は涼子のクラスだけでなく、他の女子生徒のあいだでも人気が高く、半年前の四月、講堂に集められた全校生徒の前で、

「アメリカ留学中の寮生活は退屈で、といって金も無かったんでね、自分の部屋でギターばかり弾いていました。本当は英会話よりギターの方が得意なんです」と陽に灼けた顔を恥しそうにほころばし、講堂の一番うしろからでもはつきりとわかる白い歯を見せて着任の挨拶をしたとき、「わあ」というなだれに似た女生徒の溜息に混じって、爆発するような拍手が湧いた。

あのときから涼子も、三島のことが頭を離れない。幾晩もかかって自分の気持を問いただしてみたわけだが、これはやはり恋愛に違いないと思うのだった。

授業中見つめられればそれだけで頭の中身は空まわりを始め、息苦しさばかりがやってくる。傍をすり抜けるときに鼻腔をかすめる整髪料の匂いとかすかな体臭は、涼子の体には思いがけない不意打ちをくらわせた。夢に見ることを願って寝る前に必死で姿を思い描いてみても、なぜだかうまくいったためしが無いのだが、くたびれ果てて歯も磨かず眠りこんだ夜など、ふいに現われて、強い力で涼子の腕をとってくる。夢を見た翌日は三島と目を合わせることができない。俯いて授業を受けていると、耳から入りこんでくるやわらかい英語の発音に前夜の夢が重なり、夢の中の三島を追い払うのに疲れを覚えてしまうほどだ。

三島に特別の感情を持つ女生徒は多く、彼女達は明らかに喋った。夜、自宅まで押しかけて進学の相談をする者もいた。

彼女達の話、涼子は輪の端っこに連らなって溜息まじりに聞く。なぜだか嫉妬の気持は湧かない。憧れるひとの家まで出かけて行く勇氣と行動力を見事だと思ってしまうのだ。そうした状態に臨んでさえ、反発を覚えるどころか感心してしまうということは——これはやはり恋愛ではなく、三島に抱いているのはそれ以前の感情に違いない、と涼子は、自分を見失ったような、いや元々自分には何も中身らしきものが無いのだ、といった自棄的な気分に見えられる。この気分はひどく鬱陶しいわけだが、それでいて、夜ひとりになると三島のことばかりを考えている。

母の姿見の前に正座し、太い首、すぐ寝癖のつく頭髮、丸い顔にちらばったどこいつて取り得のない目、鼻、唇を順々に見つめ、

「涼子、あんたは何者ですか。人間はね、好きなら好き、嫌なら嫌、賛成か反対か右か左か、こういうことが体の裡にピシッと決まってはじめて一人前になれるの。あんたみたいなどっちつかずの人間、誰かを愛したり、誰かのために役立つなんてこと、出来っこないわね」

鏡に掌を押し当て、気の毒な女をあわれむように、話しかけることもある。

男女の校舎は別棟になっていた。

五階建ての新築にもかかわらず、どことなく殺風景で女子生徒が囚人館と呼んでいる男子校舎の平たい屋根から「長髪を勝ちとうろ」の垂れ幕が下がり、閉じられた硝子窓の上ではためいていた。

木造二階建ての女子校舎は、長年陽に晒されて白く変色こそしているものの、雨が降るたびに落ち着いた朱色を蘇らせるスレート屋根をいただき、古びた長屋という感じで三棟が平行して建っている。校舎のすぐ西は、丈の高いコスモスを繁殖させた急斜面が二階の高さまでせり上がり、その上は広場になっていた。かつてはその場所に馬場と厩舎があった。さらにそのはずれから標高百メートル足らずのK山が、西陽をはやばやと呑みこまんと濃紺の屏風となって立ちはだかつている。頂上付近だけが朱金色の冠をいただいて輝いていた。

瀬戸内に面した平らな市街のほぼ中央にぽつんと盛り上がったこの小山のせいで、ちょうど東の裾野に張りつくように建っている校舎は、夕方になるとたちまち山陰のなかにとりこまれてしまうのだ。

中腹の小公園までの登り降りを日課にしている運動部も多く、そのあたりから、獣めいた掛け声が涼子のところまで聞こえてきた。

校舎に踏みこむと、いきなり暗い空気にとり囲まれただけでなく、靴下やスリッパの臭い、ひっそりとそこそこに籠るパンや花の甘さ、鼻をつく白墨の微粉までが一緒になって、

涼子を包みこんできた。小窓から流れこむ光が、靴箱のあたりに浮遊する細かい埃りを白く浮き立たせてはいたが、それも刻々と力を弱めていきそうだった。

すでにみんな帰ってしまったて人の気配は無かった。

そのとき、二階へ通じる踊り場のあたりで甲高い男の声がした。

「……なぜか言わんか、こら」

すぐに女の声が何か応えた。男の声は三島だった。涼子の動悸が耳にまで届いた。

スリッパを音のたたないように足元に置き、足を滑りこませるとそと階段に近づいた。顔半分のぞかせて見上げると、踊り場にふたつの影があった。

「なぜだ、はつきり言え」

三島の声がいきなり大きくなった。涼子は階段から体を退いて立ちすくんだ。女が「すみません」と小さく言うのが聞きたれた。絃を震わすように細く、しかしどこかに居直りを感じさせる不屈な声は、すぐに松尾勝美だとわかった。

突然、頬をはたく鈍い音が起きた。三島の皮スリッパの踵に打った鋳が、硬い不揃いな音をたてる。片目だけでそと見上げると、女の影がかすかに揺れながら前と同じ場所に立っているのがわかった。

「何度同じことを言わせるのか、顔を上げてみろ、何だあ、その目は、俺を馬鹿にする気か」

三島の咽が、荒々しく空気を吸いこんだ。

「女だからと思つて手加減しておればつけ上がりやがって、え、すみませんしか言えんのか、こら、こつちを向かんかこの野郎、本心じゃあ何を思うとる、俺のことを何だと思うとる、言うてみる、この口を開けて何か言うてみる」

三島の左手が松尾の頸を持ち上げ激しく揺すっている。松尾の長い影が、首を掴まれてぶら下げられた猫のように揺れる。と思うと、三島は汚いものでも放り捨てる感じで手を離れたので、松尾の体は数歩よろめき、板壁に音をたててぶつかつた。

蹲つて動かない鉄のような塊りが、先ほどよりもとくつきりと、今度は明らかに反抗の意志をこめて「すみません」と言つた。二方からの壁がぶつかる角の低い場所に体を沈めた松尾の、刃物に似た視線が三島に向けられる気配が伝わつてきた。

「この野郎」

三島が掠れた声で躍り寄ると、丸まつた影はじりつと場所を移し、首より上が、上部の明かりとりから落ちる淡い光を捉えた。濡れた石のような目が光つた。猫のようだ、と涼子は思つた。

「いいか松尾」

三島はゆつくりと言つた。

「お前には父親がおらん。それで俺もこれまで大目に見てきた。担任としてお前を庇つて

きた。母親に会いに行ったが留守だ。まあそれはいい、高校生だから母親の言うことも聞かんだらうと思つて直接お前に解つてもらはう外ないと考えた。ところがどうだ、相変らず何とかいうアメリカの兵隊と付き合うとるらしい、それだけじゃなからう、え、他に男は何人おる、お前は平気で嘘をつくが、みなバレとる。学校は休む、母親に手紙を書けば、お前がこういう小細工をする。……何だあ、そのふてぶてしい目は……

だがな、今後二度とこういうふざけた真似をしたらどうなるか、俺は知らんぞ。お前を庇わんぞ。母親と一緒に職員会議に引っぱり出してやる。いいな、こら、ちゃんと俺の顔を見ろ、二度と俺を馬鹿にするな、それから授業中、うすら笑いをするな、わかつたか」階段を下りるスリッパの音がして、すぐにとまり、「ともかくな、その不潔な長い髪は切れ、色気づくんじゃない」と吐き捨てるように言つた。

涼子は急いで靴箱のところまでもどり、そこから勢いをつけて走つた。階段の途中で三島にぶつかりそうになり「お」と避けたのは彼の方だつた。

驚いたふりをして立ちどまり「やつといま刷り終えたんです」と肩で息をしながら印刷物の束を抱え直す。山の瘴気か、何か特別な植物の髄液を思わせるような三島の体臭が、涼子の鼻先を掠めた。

「早く帰らんとしめこまれるぞ」

涼子は「はい」と元気のいい声を返し、彼の匂いをふりきつて駆けのぼつた。